

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ1:6)

【巻頭言】

「ユダヤ人宣教とパレスチナ人のキリスト者」

東京基督教大学教授・神学科長 菊池 実

SNS 隆盛の昨今、懐かしい旧友との繋がりや幸いがある。その一つがかつてイスラエルで共にヘブライ語を学んだ仲間や教師との「再会」である。他方、かつて家族でエルサレム旧市街に住んだ時に近所で親しくしたクリスチャンアラブの家族友人たち、その後転居したエルサレム新市街のユダヤ人家族とも繋がるようになった。

嬉しい「再会」にはこれまでなかったチャレンジもしばしば伴う。彼らは欧米から「帰還」したユダヤ人であり、はたまた当地に長く住む「パレスチナ人」である。あるいは、建国以前からこの地に住むユダヤ人でもある。彼らが発信する情報は自ずと政治的な色彩も持つようになる。

そして、彼らは私の「友達」にアラブ人もユダヤ人も混在していることを知るようになる。アラブ人の中には、ここ数年パレスチナ暫定自治区内で発掘調査を共にするムスリムもいれば、ここ数年で親しくなった福音的立場のクリスチャンアラブもいるので状況はさらに複雑である。ヘブライ語を学んだ時代のキブツの背景のあるユダヤ人の仲間たちはリベラルであり、エルサレムにいた仲間は保守である。彼らからすればこの私は「どちらについているのか」ということにもなるであろう。

筆者自身は「いずれでもなければ、いずれでもある。」を自身に願っている。いずれの立場からも「裏切者」と見られ、メシアニックジューの伝道に熱を入れる日本の知人たちからはパレスチナ寄りともみられかねない。しかし、彼らの中に長く身を置き、今も繋がり、毎年触れる者として、「キリストの故に、いずれでもなければ、いずれでもある」を貫きたいと願っている。

旧約聖書に繰り返される「東西南北から民が集められる」(イザヤ40:5-6、他) 預言とは、象徴(教会)なのか、歴史的事実(肉のユダヤ人)なのか、教会内にも神学的議論があって、結果的にそこが分岐点となってパレスチナ人支援になるか、ユダヤ人支援になるか、ということにもなる。しかし、もし聖書がいずれにも読めるならば、そして決定的な結論を得られないとするならば、いずれであってもよいような聖書の読みと実践を持つことも肝要と思う。ユダヤ人、パレスチナ人の双方に最大限の理解を持つことに努め、愛する故に極論に対しては同意を示さず、矛盾をやりすごさずに真剣に受け止める。それが「間に立つ方、キリスト」の弟子を目指すことかと思う。

TCUは2018年の世界宣教講座にベツレヘムバイブルカレッジ学長であるジャック・サラ師を招いた。その2年前にはメシアニックジュー(ユダヤ人でイエスをメシアと信じる人たちの呼称)のラビであるルドフル師を同講座に招いている。それぞれ一週間のレクチャーにおいては政治的な話に深入りはなく、置かれた所におけるミニストリーについて熱心に語って下さったことも記憶に残る。この日本にも上記のとおり、イスラエルパレスチナ問題を巡って、その神学的土台は異

なる。パレスチナのクリスチャンにはその信仰をサポートする契約神学が有力であり、メシアニックジューを大方支えるのはディスペンセーションに近く、また独自の神学があって、パレスチナやアラブ人には距離を置くであろう。

私個人の SNS は微々たる世界である。ただ、TCU の「超教派」の教育・研究とは、ある意味世界規模で進行しつつある矛盾の情勢に対する挑戦でもあるともこのような身近な経験の中にふと思うことがある。近年、日本においてもユダヤ人への宣教への祈りが増していることを感じる。実際、このミニストリーに直接かかわっている TCU の卒業生も少なくない。在學生にも祈り、重荷を持って備える者がある。ユダヤ人の救いはパウロの祈りであり（ローマ9章）、そこに連なることは意識の遠かった日本の教会にもあって然るべきものであろう。ローザンヌの継続委員会にもそれは明確に現れている。

神学的にも、新約聖書をオリジナルの文脈で読もうとする努力はここ数十年、欧米も含めてトレンドであり、私などは NT ライトの著作の中にその反映を感じることも多い。私自身、David Stern 博士の「Jewish New Testament Commentary」は殊に福音書を読む上で大事にしてきた書である。

他方で、メシアニックジューの聖書研究には、教会史における信条の形成やカテキズムを尊重する傾向が近年顕著となってきた。

これらの教会側からの紀元1世紀のユダヤへのアプローチ、他方、ユダヤ人信仰者側からの教会へのアプローチもあって、相互の祈りと謙虚さの結実が目に見えてあることに喜びを感じる。気づけば、日本の教会の中に過去の議論が残されていることもあるのではないか。あるいは、ユダヤ主義への行き過ぎた傾倒もよく目にするのも事実だ。

ベツレヘムバイブルカレッジの地域宣教は目覚ましい。彼らは、マイノリティのマイノリティである。（イスラエル>パレスチナ>ムスリム>正教会/カトリック>アラブ福音派）。メシアニックジューもマイノリティである。彼ら双方の信仰の戦いと彼らの祈りに心留める時、この難題に、矛盾を受け入れるキリスト者の宣教論に柔軟性が与えられるような気がしてならない。そして、彼ら自身の中にも異なる方向への変化が生じているのだ。

【JMR レポート】

今回の JMR レポートは、2019 年 11 月 12～13 日に、日本バプテスト連盟博多キリスト教会にて開催された「九州宣教フォーラム 2019」（JEA 宣教委員会・九州宣教フォーラム実行委員会主催、参加者 138 名）における竿代照夫師の講演のレジюмеを、先生のご厚意により掲載させていただきました。

また、『中外日報』のオンライン情報からも、記事を転載させていただきます。

講演：「福音のため共に戦う～教職・信徒の宣教協力～」

竿代照夫（イムマヌエル総合伝道団）

【聖書】「ピリピ 1:1～11、27～30」

【主題聖句】「霊を一つにして堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにしてともに戦っていて、どんなことがあっても、反対者たちに脅かされることはない」（ピリピ 1:27-28）

【はじめに】与題は、「キリストの愛に応じて一宣教協力（教師と信徒のチーム力のステップアップ）」で、「教師と信徒の宣教協力による成長を VISION、賜物、価値観を含めて聖書から語るように」との依頼であった。私なりに咀嚼して纏めたい。

A. 「教職と信徒」の関係

1. 新約聖書における「教職と信徒」の関係

- ・「教職・信徒」の区別：新約聖書中この二者の区別は明確でないが、自分の職業を捨てて巡回伝道に当たるグループと、運動を支援するグループに自然に二分されていた（関川泰寛：2001「聖霊と教会—実践的教会形成論」）。その流れが「職制」に引き継がれた。双方共同神の民であり、違いがあるとすれば、それは職務の違いであって、上下関係ではない。神の選びと宣教への派遣はすべてのキリスト者に向けられている。この面で、信徒と教職の協力が必要である。「神の選びと派遣は本来すべてのキリスト者に向けられており、宣教の務めは、神の民としてのキリスト者共同体全体に神から委託されたものです。」（松永希久夫：1996『神の民の信仰、新約篇』）
- ・職制の原初的形態：初代教会の指導層は、大きく4つ：
 - ▶使徒：主の直接の弟子で、主の言動と復活を目撃し、直接使命を与えられた人々
 - ▶長老：ユダヤ社会の長老（高年齢で、経験を積み、尊敬された者たち）がキリスト教会に導入（使徒14：23）。使徒と融合（使徒15：4）
 - ▶監督：ローマ社会の監督（宗教・司法・行政の責任者）がキリスト教会に導入。長老と同義語、或いは、長老団の議長格（テトス1：7）
 - ▶執事：テーブルに仕える者（使徒6：6）、後に監督に次ぐ役職へ（ピリピ1：1）
- ・異なる賜物と異なる役割：職制上の区別と共に、賜物の違いも意識されていた（Iペテロ4：10）。「分業と一致」は、人体における諸器官の譬えで説明される（ローマ12：4、5）。賜物は「使徒、預言者、伝道者、牧師また教師」（エペソ4：11）、「奉仕、勧め、分け与え、指導、慈善」（ローマ12：7、8）、「知恵の言葉、知識の言葉、信仰、癒し、奇蹟、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力」（Iコリント12：8～10）等。これらが連携して、キリストの体を建て上げるために用いられる（エペソ4：16）。

2. その後の歴史的発展

- ・職制の固定化：カトリック教会の確立によって職制が固定化され、教職（司祭）と信徒との区別は、越えがたい淵のようになってしまった。
- ・万人祭司主義：プロテスタントが「万人祭司主義」を掲げたのは、カトリックの司祭中心主義への反動。万人祭司主義とは「全ての信仰者は自分にとって祭司であり、他人の仲介なしに直接神に近づく事が出来るという考え方」と定義される。
- ・「アマの信徒・プロの教職」意識の残存：宗教改革を経た教会でも、未だに「アマの信徒・プロの教職」という区別意識が残っている。神の言葉を伝える者達が直接主に召され、使徒伝承を受け、長老達を任命することで教会の頭であるキリストの権威は具現化する。同時に、信じる者との平等性は、魂の価値の平等、役職の違いは役割の違いに過ぎないとの認識で確保される。しかし、教職がプロとして教会を中心的に運営し、信徒はアマとしてそれに協力するだけという「プロ・アマ」意識は、教会本来のあり方ではない。

B. 宣教における「教職と信徒」の協力

1. ピリピ書に見る「教職と信徒」の宣教協力

- ・パウロの感謝：ピリピ信徒が「最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたこと」（5節）を感謝している。「携わった」（コイノーネオー）とは、重荷を共に担ぐこと。リディアはパウロ達の宿・集会所として自宅を提供し（使徒16：40）、女占い師と看守を含む初期の信徒達はパウロが去った後も迫害にもめげず福音を伝え、パウロ達に応援物資を送り続け（ピリピ4：15-16、18）、エルサレム飢餓救済のためには力以上の援助をした（IIコリント8：1～5）。これらをパウロは感謝している。更に7節、「私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人たち（スュンコイノーヌウス）」と表現している。
- ・パウロの祈り：彼らの愛が「知識とあらゆる識別力によっていよいよ豊かになり、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのないものとなるよう」（1：9～11）祈っている。

- ・パウロの勧め：福音に相応しく生活し、その結果「霊と心をつにすること」（目的と動機を同じくすること）、また、お互いの競争心、不一致を除くこと、特に二人の女性指導者の対立を周囲の協力によって止めること（4：2、3）、「ともに奮闘すること」（プロレスのタッグマッチのように）をパウロは勧めている。

2. 現代教会における教職・信徒の協力

- ・教職と信徒の「プロ・アマ」意識の克服：信徒が牧師依存的にならず、各々に与えられた賜物を自由に発揮する、牧師は信徒の自主的な働きを応援し、信徒指導者を霊的、实际的に訓練するという形が噛み合うことが望ましい。このバランスが崩れ、教職がプロとして教会を中心的に運営し、信徒はアマとしてそれに協力するだけ、という「プロ・アマ」意識は、教会本来のあり方ではない。「神の選びと派遣は本来すべてのキリスト者に向けられているのであり、したがって神から与えられた宣教のつとめもまた、第一には専ら教職のつとめとしてではなく、神の民としてのキリスト者共同体（教会）の全体に神から委託されたつとめとして理解され、受けとられることが正しいであろう。とすると、この宣教のつとめの担当と遂行は、牧師と信徒との共同の責任として第一に考えられることの方が、むしろ新約聖書の精神に相応しいのではなかろうか。」（森野善右衛門、1980『他者のための教会』）と、信徒と教職の協力の意義を説く。

私が少年期・青年期に属していたインマヌエル船橋教会では、牧師は伝道と説教に専念し、CSや伝道一般の具体的運営については信徒が主体となって進め、牧師は大体それを承認し応援するという形で宣教が行われていた。教職・信徒の宣教協力の一つのモデルではなかったかと思う。

- ・伝道における協力：教職が懸命に伝道し、信徒が傍観しているという図式ではなく、協働するために以下四つの段階での試みを期待したい：
 - ▶ビジョンの共有：宣教の本質、目標、道筋などの点で聖書がどのように教えているか、聖書の中にその実例があるか、などについて教職・信徒が共に学び、ビジョンを共有することが大切
 - ▶戦略作りに共同参画：伝道の具体的戦略作りについて、それぞれの立場から具体的戦略・方策を出し合い、合意できる点を纏める作業が必要
 - ▶实际的なチーム作り：戦略をどのように実践に移すかについて、役割分担を話し合い、合意することが大切。そして、それを実践していく過程で中間的な見直しや調整を継続することがもっと大切になって来る。
 - ▶評価の仕組み：一定の期間を経て、その戦略がどの程度達成されたかを評価し、必要ならば、新たな方策を考えることも大切
- ・宣教戦略の具体例
 - ▶裾野を広げる伝道（プレ・エバンジェリズム）：一般の人が興味を抱く教室やサークル（手芸、子育て、語学、音楽、料理など）が伝道の機会を広げる。信徒の賜物が活かされる場としても有効
 - ▶聖書を共に学ぶ：信徒・求道者を巻き込んだ「聖書を学ぶ会」などの試みも有効
 - ▶スモールグループの活用：スモールグループなども閉鎖的にしないで、求道者が入り易い雰囲気を保つことも、「関係性を築く」伝道の足掛かりになる
 - ▶魅力ある礼拝の場：多くの求道者が礼拝出席から始まることを考慮し、礼拝のプログラムを求道者目線で工夫する必要がある。その為に、信徒・教職の話し合いが必要
 - ▶子供達・青年たちへの伝道と育成：伝統的な「教会学校」の枠に囚われない子供の獲得の方法、青年に参加意識を持たせる礼拝の在り方、等・・・

終りに：二つの鍵を提示したい

- ・贖いの恵み：「というのは、キリストの愛が私たちを捕らえているからです。・・・一人の人が全ての人のために死んだ以上、全ての人が死んだのである、と。キリストは全ての人の

ために死なれました。それは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためです。」（Ⅱコリント5:13~15）

- ・人々への適応力と工夫：「弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをとともに受ける者となるためです。」（Ⅰコリント9:22~23）

[参考文献]

竿代照夫：2001「聖書の教会とは」（「つばさ」誌4月号に所載）イムヌエル総合伝道団

関川泰寛：2001『聖霊と教会---実践的教会形成論』教文館

藤本 満：1999「教職制---歴史的考察と諸問題」（『職制と按手礼』所載）イムヌエル総合伝道団

ボンヘッファー：1976『教会の本質』（森野善右衛門訳）新教出版社

松永希久夫：1996『神の民の信仰、新約篇』教文館

森野善右衛門：1980『他者のための教会』新教出版社

J. H. ヨーダー（矢口以文、矢口洋生、西岡義行訳）：2002『社会を動かす礼拝共同体』東京ミッション研究所

中外日報の新聞記事から【2019年9月~2019年12月】

伝統仏教教団の過疎対策と宗派間の連携 — 過疎地寺院問題<<8>>

2019年12月6日 論・寄稿

浄土真宗本願寺派総合研究所研究員 那須公昭氏

筆者は、浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派）に属しており、宗派に付置された研究所（現総合研究所）にて、過疎地に立地する寺院の現状や課題を探究している。最初に、教団の過疎対策の一例として、筆者の所属する本願寺派の過疎対策の経緯を簡単に紹介しよう。

本願寺派では、1970年代より、農山村部にある寺院を中心に人口流出に伴う「過疎化」が継続的に問題視されており、実地調査や都市部との連携などを中心に対策が展開された。2012年、「過疎地域対策担当」を設置し窓口の統一化をはかり、教団内での過疎問題の集約や施策を展開している。他の教団においても過疎対策は、始動時期に差はあるものの、教団運営において無視できない問題として扱われ、さまざまな議論や対策が講じられている。

ただ、教団内に限定した現状把握や施策の展開には限界が生じていると思われる。寺院は単に教団に所属しているだけの存在ではないからだ。地域社会との関わりやその寺院がもつ独自の関係性など、多様なつながりの上に寺院は成り立っている。

特に「過疎」とは人口流出に伴う地域社会の弱体化を意味する。地域社会が疲弊すれば、寺院も弱体化する。また、こうした地域の疲弊からくる寺院の苦悩に教団の違いは関係ない。

15年、真宗大谷派と本願寺派の共催で、「過疎問題連絡懇談会」（以下、懇談会）を発足した。事務局は、真宗大谷派企画調整局と本願寺派寺院活動支援部（過疎地域対策担当）が2年度ごとに交代しながら行う。過疎問題に詳しい有識者を招聘した勉強会と過疎問題に関心の高い各教団関係者や研究者が会員として集い、各教団の過疎に対する考えや施策、課題などを提示しあい、情報交流を進めている。

これまでに、日蓮宗・浄土宗・真宗大谷派・真言宗智山派・臨済宗妙心寺派・高野山真言宗・本願寺派が課題や施策などを報告し共有してきた。さらに、18年より、天台宗・真言宗豊山派に加え、全日本仏教会・真宗教団連合も参加された。

懇談会の議論をもとに、各教団の過疎対策をまとめると、「寺院活性化」「寺院の統廃合」「現状把握」の3点に集約することができるだろう。ここでは、懇談会で共有された対策について、上記の3点をまとめ、筆者の所感を述べることにする。

まず、「寺院活性化」について紹介する。教団それぞれにアイデアを駆使しつつ、独自の活動展開がなされている。近年では、住職家族や門徒（檀家）のモチベーションアップをはかる研修会が増えている。

真宗大谷派や日蓮宗では、一般社団法人お寺の未来と提携し、「寺院運営計画書」作成講座を各地で展開している。また、本願寺派や日蓮宗、真宗大谷派では、支援員制度を導入し、過疎地寺院それぞれの課題に対して、教団の施策と照合しながら、提言や相談などを試みようとしている。

曹洞宗や日蓮宗では、教団のホームページ内で寺院検索を手がけ、ネット上で検索しやすい環境整備を行っている。臨済宗妙心寺派では「第二の人生プロジェクト」として、年金収入の見込める中高年者を対象に僧侶として養成し、経済基盤が厳しい寺院への派遣を行っている。

妙心寺派の取り組みは、教団が抱える兼務寺院の多さが起因している。住職が不在となる寺院の要因は、経済事情や傷んだ伽藍、檀家の離散などさまざまだが、特に寺院後継者の不在が大きい。寺院後継者の育成は、どの教団にとっても喫緊かつ重要な課題である。

これらをふまえると、現時点からさまざまに試行錯誤を重ねつつ住職や檀家など関わる人のモチベーションをあげ、次世代が引き継ぎたくなるような魅力ある寺院活動の展開を行うことが何よりの過疎対策につながるものと考えられる。

次に、「寺院の統廃合」をみてみよう。統廃合とは、寺院の合併もしくは解散を意味する。

本願寺派では、合併・解散についてそれぞれ手引き書を作成し、所轄庁の諸書類の申請など事務処理の支援を行っている。また、妙心寺派と本願寺派では、解散・合併にあたる事務費や建物除去費に対する助成金制度がある。

妙心寺派は、状況に応じて宗務本所職員を特命兼務住職に任命し、宗務本所主導で解散手続きを行っている。この事業を担当する宗門活性化推進局顧問の久司宗浩氏は、懇談会にて「寺院の廃寺は、檀家や地域住民など、残された人の心のケアが一番大切」と強調された。廃寺に伴い、残された檀家や地域住民のさまざまなケアについては、教団を越え、さらなる議論や連携などが必要だと考える。

最後に「現状把握」を取り上げる。各教団は、5年ないしは10年単位で、「宗勢調査」もしくは「教勢調査」と呼ばれる教団内の悉皆調査を実施している。さらに、特定の地域を選定し、住職家族や地域住民を対象とした実地調査を行っている。各教団は、これら二つの手法を用い、相互に補完しながら現状把握に努めている。

ただ「過疎」として問題視される地域が教団により異なる。この相違点をまとめると、以下の2点が指摘できる。一つには、教団所属の寺院が過密化している地域に注目するケースである。本願寺派では、滋賀県や奈良県南部、中国地方山間部など、真言宗智山派では佐渡島や房総半島などである。

二つには、行政の示す「過疎指定地域」を使用し、過疎地域か否かの判断を行うケースであり、日蓮宗や浄土宗がこれにあたる。過疎指定地域は、各自治体の財政力指数や人口減少率により判断されるが、寺院の実態と照らし合わせると、単純化は難しいだろう。

たとえば、滋賀県は、人口増加の見られる数少ない自治体であるが、当地にある多くの本願寺派寺院は過疎化を問題視している。滋賀県には、本願寺派寺院が約600カ寺あり、1集落に3カ寺以上立地しているケースも多く、門徒の大半が寺院近隣に集中し、門徒数30軒未満といった小規模型が多い。

つまり、新興住宅地の開発などにより近隣地域は人口増加しているが、寺院が所在する集落の人口は減少しているため、集落が衰退し、寺院運営が弱体化していることがうかがえる。こ

のように、どの地域を過疎地と判断し、施策を講じるかは、教団内での寺院分布などを考慮する必要がある。

以上、各教団の過疎対策に共通する3点を概観したが、最後に懇談会の取り組みを紹介して終わりたい。懇談会では、17年に石川県七尾市にて、教団を越えた実地調査を行った。本紙9月25日号の徳田剛氏が指摘されるとおり、この調査により、他出子の所在地や帰省状況から、寺院のもつ強みや問題点が明らかとなった。

18年、この結果を七尾市仏教会の寺院に報告した。その後、参加者には、宗派関係なくグループになってもらい、ワークショップを行った。すると、参加者から「地域の悩みは教団の違いは関係なく同じだった」「教団ではいえない悩みを吐露することができた」といった声を多数頂戴した。教団は異なるが、同じ地域住民であり、寺院運営の責任を持つ方々である。地域の苦悩を共有することにより、新たな関係性が構築され、違った視点から活動が展開されるのではないかと可能性を感じたワークであった。

各地で教団の垣根を越えて寺院の連携をはかり活動することは、さまざまな可能性を生み出すチャンスだと考える。例えば、地域の行政機関やNPOなどの諸団体と連携が組みやすくなることもあるだろう。特に行政機関は、「政教分離」により一宗教団体と協力体制をしくことは難しいが、地域単位で各宗教団体が連携しアクションをおこせば、関心を寄せてくれる可能性がある。こうした地域にある団体と教団や寺院が連携し、共に考え、さらなる活動を展開すれば、人口減少する日本社会に仏教界が大きなうねりの一躍を担うことができると、筆者は期待している。

教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

カトリック中央協議会 諸文書：教皇文書

2019年「世界宣教の日」教皇メッセージ

「洗礼を受け、派遣される——世界で宣教するキリストの教会」 (2019. 10. 20)

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

教皇ベネディクト十五世の使徒的書簡『マキシムム・イルド』（1919年11月30日）公布100周年を記念して、わたしは2019年10月を、宣教活動のための特別な期間とするよう全教会に呼びかけました。ベネディクト十五世の預言者的で先見の明のあるこの書簡は、教会の宣教活動を刷新することと、死んで復活したイエス・キリストの救いを全世界に知らせ、伝えるという使命を福音宣教の視点から見直すことが、今日にあってもいかに重要であるかを認識させてくれます。

このメッセージのタイトル、「洗礼を受け、派遣される——世界で宣教するキリストの教会」は、10月に行われる福音宣教のための特別月間のテーマと同じです。この特別月間を記念することは、第一に、イエス・キリストへの信仰という、洗礼のたまものとして無償で受けた信仰を貫くことの宣教的な意味をあらためて見いだす助けとなります。わたしたちが神の子となるということは、個人としてではなく、つねに教会としての行いです。父と子と聖霊の三位一体の神との交わりから、他の多くの兄弟姉妹とともに新しいいのちが生まれるのです。この聖なるいのちは売り物ではなく——わたしたちは信仰を強制しません——、与え、伝え、知らせるべき宝です。それこそが宣教の意味するところです。わたしたちは無償でこのたまものを受け、だれ一人のけ者にせず、無償で分かち合います（マタイ10・8参照）。神は、救いの普遍的秘跡である教会を通して、すべての人が真理を知り、ご自身のいつくしみを受けることによって

救われるよう望んでおられます（一テモテ2・4、3・15、第二バチカン公会議公文書『教会憲章』48参照）。

教会は世界中で宣教します。イエス・キリストへの信仰は、すべてのことがらに対する正しい視点を与え、神の目と心で世界を見られるようにします。希望は、わたしたちが真にあずかっている神のいのちの永遠の地平に向けてわたしたちを開きます。秘跡と兄弟愛において前もって味わっている愛は、地の果てまで出向いて行くようわたしたちを駆り立てます（ミカ5・3、マタイ28・19、使徒言行録1・8、ローマ10・18参照）。地の果てまで出向いて行く教会は、宣教における回心を永続的に行わなければなりません。どれほど多くの聖人と信者が、このように無限に開かれることと、このようにいつくしみをもって出向いて行くことは、愛によって、さらにはたまものといけにえと無償性という愛の本質的な論理によって駆り立てられることを通して実現可能となることをあかしし、示してきたことでしょう（二コリント5・14-21参照）。神のことを説く、神の人になってください（使徒的書簡『マキシムム・イルド』参照）。

これは、わたしたちに密接にかかわる命令です。わたしはつねに宣教者です。あなたはつねに宣教者です。洗礼を受けた人はだれもが宣教者です。愛し合う人はじっとしていません。自分の殻から出て、魅了されたり魅了したりし、相手に自分自身をささげ、いのちを生み出す結びつきを織り上げます。神の愛にとって、無用な人、取るに足らない人などいません。わたしたちは神の愛の実りなので、一人ひとりがこの世における宣教者です。たとえ自分の父親や母親が嘘や憎しみや不誠実な行いによって愛を裏切ったとしても、神がいのちのたまものを与えることをおやめになることは決してありません。いかなるときも、ご自分の子ども一人ひとりを、ご自身の聖なる永遠のいのちへと向かう者にしてください（エフェソ1・3-6参照）。

そのいのちは、洗礼によって与えられます。洗礼は、罪と死に打ち勝ったイエス・キリストへの信仰というたまものを与え、神の像と似姿にわたしたちを新たに生まれさせ、わたしたちを教会というキリストのからだの一部にします。ですから洗礼は、救いのために真に欠かせないものです。わたしたちはいつどこにいても、御父の家では、孤児でもよそ者でも奴隷でもなく息子や娘であることを、洗礼は保証するからです。キリスト者における秘跡的な現実——それは聖体のうちに成就します——とは、回心と救いを待ち望んでいるあらゆる人にとっての召命であり目的地です。洗礼とは、御子のうちに人間をご自分の子どもにするという、神がたまものとして与えてくださる約束の実現にほかなりません。わたしたちは自分の肉親の子どもですが、本来の父と真の母は洗礼において与えられます。教会を母としてもたない者は、神を父としてもつことができませぬ（聖チプリアノ『カトリック教会の一致について』6参照）。

このように、わたしたちの宣教は神の父性と教会の母性に根ざしています。なぜなら洗礼には、イエスが過越にあたって示した派遣の命令が本質的に備わっているからです。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもこの世の和解のためにあなたがたを聖霊で満たし遣わすと、イエスは言われました（ヨハネ20・19-23、マタイ28・16-20参照）。キリスト者とは、このように派遣される人です。それは、受胎から自然死に至るまで、あらゆる人のいのちに本質的に備わる価値と人間の尊厳を確信できるよう、すべての人に神の養子としての召命を伝えるということです。わたしたちの歴史における、父としての神の働きかけが文化としてあからさまに拒否され、世俗主義がはびこることは、一人ひとりのいのちを互いに尊重し合うこととして表れる、あらゆる普遍的な真の兄弟愛に対する妨げです。イエス・キリストという神がおられなければ、あらゆる相違は恐ろしい脅威となり、兄弟愛に基づく歓待も、人類の実り豊かな一致も実現できなくなります。

イエス・キリストのうちに神から与えられる救いの目的の普遍性に基づいて、ベネディクト十五世は、国家主義や自民族中心主義から生じるあらゆる閉鎖性を乗り越え、植民地支配、また経済や軍事における利益と、福音の告知とのあらゆる混同を克服するよう呼びかけました。そして、その使徒的書簡『マキシムム・イルド』において、教会の宣教の神聖な普遍性は、自国や自民族の中だけのものだという考えを捨てるよう求めていると記しました。イエス・キリストによる新たな救いへと文化と共同体を開け放つには、民族や教会が陥っている内向性をすべて克服する必要があります。今日でも教会は、家、家族、故郷、母国語圏、地方教会から出るようにとの呼びかけに、洗礼の恵みによって、進んでこたえる人を求め続けています。そう

した人々は、まだイエス・キリストの秘跡とキリストの聖なる教会によって変えられていない世界の人々のもとに派遣されます。神のことばを告げ、福音をあかしし、聖霊のいのちをたたえながら、彼らは回心を呼びかけ、洗礼を授けます。そして一人ひとりの自由を尊重し、派遣された先の人々の文化と宗教と対話しながら、キリスト者の救いを伝えます。つねに教会が必要としている「諸国民への宣教 (missio ad gentes)」は、すべてのキリスト者の回心という永続的なプロセスに根底から寄与しています。イエスの過越を信じること、洗礼を授ける教会として派遣されること、地理的、文化的に自我や家族から離れること、罪のゆるしと、個人的、社会的な悪からの解放を求めること。これらすべては、地の果てまで出向く宣教を要求します。

アマゾン特別世界代表司教会議 (シノドス) が摂理のもとに同じ時期に行われることを考えると、わたしは、イエスから聖霊のたまものうちに託された宣教が、いかにこの地域と現地の人々に今も必要とされているかを強調せずにはられません。新たな聖霊降臨が教会の扉を開きます。どの文化も自らの中に閉じこもらず、どの民族も孤立せずに、信仰の普遍的な交わりが開かれるためにです。自分の民族的、宗教的帰属について自ら明らかにする際には、自分の殻に閉じこもったままでいてはなりません。イエスの過越は、社会、宗教、文化の狭い境界線を打ち破り、すべての人に真のいのちを与えてくださる復活した主の真理への心からの回心に向けて、人間の尊厳への敬意のうちに成長するよう招いています。

この点についてわたしは、2007年にブラジルのアパレシーダで行われたラテンアメリカ・カリブ司教協議会総会の開会に際して教皇ベネディクト十六世が述べたことばを思い起こし引用することにより、わたし自身のことばにもしたいと思います。「ラテンアメリカとカリブ諸国にとって、キリスト教信仰を受け入れるとは何を意味するのでしょうか。それは、先祖が知らず知らずのうちに、その豊かな伝統の中で探し求めてきた未知の神、キリストを知って受け入れることを意味します。キリストは、彼らが静かに切望してきた救い主です。それはまた、洗礼の水を通して、神の養子とする神聖ないのちを受けることも意味します。さらには、彼らの文化を豊かにし、受肉したみことばによって植えつけられた多くの種とその芽を清め、はぐくむことにより、彼らを福音の道へと導く聖霊を受けることでもあります。……イエス・キリストのうちに人となられたみことばは、歴史となり、文化ともなりました。キリストと普遍教会から離れ、コロンブス以前の時代の宗教をよみがえらせることを理想とすることは、前進ではなく後退です。それは、歴史上の過去のある時点への退化にほかなりません」(「開会のあいさつ (2007年5月13日)」、Insegnamenti III, 1[2007]855-856)。

わたしたちの母であるマリアに教会の宣教をゆだねます。おとめマリアは、受肉のときから御子と結ばれ、イエスの宣教に全面的に参加し、活動しました。宣教は、十字架のもとで、マリア自身の使命となりました。教会の母として、聖霊と信仰のうちに新しい神の子らが生まれるのを助けておられるのです。

最後に、『マキシムム・イルド』の中ですでに宣教機関として提案されている、教皇庁宣教事業について少し述べたいと思います。教皇庁宣教事業は、宣教の魂である祈りと、全世界に散在するキリスト者の愛のわざをもって、教皇の宣教活動を助ける世界的なネットワークという形で、教会の普遍性のために尽くしています。その献金は、部分教会の福音宣教活動(信仰弘布会)、地方教会の聖職者の養成(使徒聖ペトロ会)、世界中の子どもたちの間での宣教意識の向上(児童福祉会)、キリスト者の信仰の宣教的側面の促進(宣教師連合)において教皇を支えています。わたしは、これらの会をあらためて後押しするにあたって、2019年10月の「福音宣教のための特別月間」が、教皇職のために尽くす彼らの宣教活動の刷新に役立つよう望みます。

男女宣教者と、洗礼を通して教会の宣教になんらかの形でかかわっているすべての人に、心から祝福を送ります。



バチカンより
2019年6月9日
聖霊降臨の主日

《小規模教会を伝道拠点に》

2030年問題が日本基督教団（以下、教団）に迫っています。2030年問題とは、この年を境にかなりの数の教団の教会が消滅すると言われている危機のことです。今、この危機に対する教団の取り組みが問われる中、教団常議員会は、「教団伝道推進基本方針―共に祈ろう、共に伝えよう、共に献げよう」展開案を決議しました。

この決議が画期的なのは、教団の教会が一致して日本の伝道に取り組む業が、具体的に示された点です。教団は全国に1685教会を有します。これほど多くの教会を有することは教団の強みと言えます。

しかしその中には少子高齢化が進み、消滅の危機にある小規模教会があることを忘れてはなりません。小規模教会は主の御体なる教会を立て続け、生き生きとした礼拝を献げています。その村に、その島に、その町に「主は生きておられる」との確信の中で伝道がなされていることに教団は絶えず励まされてきました。

この小規模教会を教団の伝道拠点教会として支えましょう。そのことから教団の全ての教会に血が通いだし、教区の伝道が推進され、教団の伝道に勢いが増していくでしょう。一人一人が伝道に熱くなり、主から託されたこの国の伝道を推進していかねばなりません。

《共に祈ることから》

基本方針の第一は「祈ること」です。祈ることから始めましょう。主イエス昇天後の弟子たちは「心を合わせて熱心に祈っていた。……百二十人ほどの人々が一つになっていた」（使徒1・14～15）とあります。心を合わせ、熱心に、一つになって祈る。その祈りに応答するように聖霊が降りました。

伝道は聖霊なる神の御業です。神の御業に答え、祈りの輪を広げようではありませんか。基本方針では、毎月第3主日を「日本伝道の推進を祈る日」に制定しました。礼拝出席者数20名以下の教会を第3主日に覚えて祈ります。全ての教会が活性化され、この国の伝道に一致して取り組み「このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった」（使徒19・20）と言い得る教団を共に目指しましょう。（「信徒の友」11月号より）

【4910号】▼宣教研究所委員会▲ 今期、5つの研究テーマを決定

2019/09/14

第2回宣教研究所委員会が7月1日に教団B会議室において、全委員の出席と道家紀一担当幹事の陪席により開催された。岡本知之委員長の開会祈禱に続き、第1回委員会議事録案を承認した。次に、今総会期の研究テーマについて事前に各委員から寄せられた研究テーマ案を小林光書記がまとめた資料を基に委員全員が意見を述べた。

以下は主な発言内容である。家族への伝道、教会間の連帯と相互牧会、教会の霊性、ディボーションのあり方。ダウンサイズして行く教団・教会のあり方、キリスト教学校との協力体制、高齢者への伝道。天皇制の問題、日本の宗教・日本人の宗教性に関して。認知症の信徒への対応。教会と付属施設との関係、SNSを用いた伝道。

以上の意見を集約し、5つの研究テーマに絞った。①「教会の霊性」、②「教会のダウンサイジングの問題」、③「日本人の宗教性とキリスト教」、④「教会と付属施設」、⑤「SNSと伝道」。次回の委員会において、これらのテーマに相応しい研究員候補を挙げ、研究チームを組織することを今後の課題とした。

続いて、日本基督教団宣教研究所発行の冊子『青年と性～キリスト教倫理の視点から』に関する部落解放センターからの意見書について話し合い、同センターの要望を受けとめ、岡本委員長名で、今後は冊子の配布、販売、増刷をしない旨の返事をすることを承認した。

次に、前総会期は発行しなかった「宣研だより」に関しては、今期は発行することとし、研究テーマの調査、研究状況と共に各委員が宣教研究所委員会に関わる思いを綴ることにした。柴田彰委員の開会祈禱をもって終了した。（小林 光報）

伝道の危機が叫ばれて久しい。高齢化、少子化、若者離れ、受洗者の減少、教勢の低下。教会の体力が落ちていることへの危機感からの声だ。危機であることが普通となって、これだけでいと麻痺してしまうほど恐ろしいことはない。一方、声高に危機を叫び、ただあおるだけであってもならない。何が危機なのか。なぜ教会の体力が落ちているのか。しっかりと見据えなくてはならない。▼参加しているある学びの会で「御言葉の危機」とやや聞き慣れてしまっていて、危機感そのものが喪失しかねない言葉を、御言葉に対する飢餓、空腹と言い直すことに触れた。これもアモス書の言い直しかもしれないが。説教が会衆の霊的飢餓状態を作っていることから教会の体力低下が起こっている、と改めて身に迫ることとして聞いた。▼説教について語るのは、当然、説教者自身の首を絞める。しかし、教会の体力低下は、教会マネジメントのことでも、経営センス、人的交流の巧みさでもなく、何よりも御言葉が届いていないことから来ている。説教者が真摯に反省するならば、御言葉に聞くこと、御言葉を語ること、御言葉を届けることから出発するほかない。

日本聖公会【日本聖公会 管区事務所だより（2019年7月25日 第345号）】

「続・エキュメニカルつながりの中で」

管区事務所総主事 司祭 エッサイ 矢萩新一

WCC（世界教会協議会）は、およそ110カ国・350教団が加盟する世界最大の超教派の共同体で、日本の中では、日本基督教団・日本聖公会・在日大韓基督教会・NCC（日本キリスト教協議会）が加盟しています。WCCでは、毎年地域と課題を絞って「正義と平和の巡礼」が行なわれています。今年はアジアがその対象となり人種差別（レイシズム）というテーマで、大阪で青年のプログラム、東京でフィールドワークと神学者会議が先日行なわれました。会議や情報交換だけではなく、実際に現場を訪れ、出会いと学びの中から課題を捉えていく姿勢は、どの地域の教会においても、正義と平和を求めるキリスト者として大切にしなければならない姿勢です。残念ながら日本には、「在日・滞日外国人、沖縄、アイヌ、部落、マイノリティ」への差別という形で、人種差別が起こっています。歴史をしっかりと学び、一人ひとりの命を大切に寄る添う気持ちが、差別をなくす最も有効な手段だと思います。東京での会議の後、WCCの副総幹事と加盟教派の総主事たちが懇談し、それぞれの教派が抱える課題を分かち合い、教派間の協働や、ことに平和の課題に関して宗派を超えた協働ができる日本の宗教者の交わりは、世界的にも珍しいと関心が寄せられました。神さまと人々、世界と教会に仕える私たちの使命を常に覚えながら、違いを指摘し合うのではなく、どこで手をつなげるのかということを探し続けていくのが、エキュメニカルな共同体です。日本聖公会のエキュメニカルなつながりは、WCCの他にも、CCA（アジアキリスト教協議会）、NCC、日本キリスト教連合会、カトリックや日本福音ルーテル教会とのエキュメニズム委員会、キリスト者平和ネット、世界祈祷日や一致祈祷日の礼拝などがありますし、宗派を超えたつながりには、日本宗教連盟や全国教誨師連盟、WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会、宗教者平和ネットなど、私たちはたくさんのチャンネルを持っています。それぞれの教会の地域の中でも普段から交わりを深めている様々なつながりがあると思います。教会が置かれた地域における大切なパートナーだという意識を持ち、協力し合えることがあれば、より良い宣教・牧会につながるのではないのでしょうか。

「太陽の輝き、月の輝き、星の輝きと、それぞれ違いますし、星と星との間にも、輝きに違いがあります。」（Iコリント15:41、聖書協会共同訳）



「主の道を整える宣教」

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩 新一

度重なる台風や大雨によって、大きな被害を受けられた地域のみなさまや、今もなお不便な生活をされているみなさま、支援活動をされているみなさまのご安全と、ご逝去されたみなさまの魂の平安、ご関係のみなさまへの慰めをお祈りいたします。このところ、日韓の政治摩擦、香港でのデモ、イングランドのEU離脱、アメリカとアジア諸国との関係、天皇代替わり儀式的政教分離の課題など、第2次世界大戦の反省に基づく国際関係や国内意識の岐路に立たされていると感じています。日本聖公会は敗戦後50年の1995年に宣教協議会を開催して「聖公会の戦争責任に関する宣言」を採択し、翌年には総会としてその宣言を決議しました。日本の侵略戦争によって命をないがしろにされたアジア諸国の人々に対する謝罪と、和解と平和を求める日本聖公会の宣教の方向性がそこに示されています。そして、2012年の宣教協議会ではそのことを大前提としながら、あらゆる命の尊厳を大切にすることと、教会が立てられた地域の課題に誠実に向き合い、教会の宣教・牧会に丁寧に関わっていくことが再確認されました。神さまの創造の秩序を大切にしながら、すべての命に仕えていこうとする姿勢が、私たちキリスト者の使命であると再確認したいと思います。このことは、時代や社会の価値観が変わっても、私たち信仰者の要だといっても過言ではないと思います。地球の温暖化による環境の課題も、教派や宗派を超えて世界的に取り組まなければならない課題だと認識されています。原発のない世界を求める国際協議会が今年5月に仙台で行なわれ、協議会の特祷として、「わたしたちはあなたによって委ねられた被造物を治めよとのご命令に背き、自然資源を乱用し、原発事故によって自然と人びとの生活を破壊しています。どうか、これらの罪をお赦してください。わたしたちがあなたの愛に立ち帰り、苦難の中にある人びとをおぼえ、あらゆるいのちと共生できる原発のない世界を造りだす知恵と力をお与えください」と祈りました。そして協議会声明の中では、節電・省エネへの取り組みと、再生可能エネルギーへの政策転換に向けた呼びかけがなされています。2022年に宣教協議会開催の計画がありますが、各教会・教区においても、宣教体制の立て直しということと同時に、あらゆる命に寄り添う教会として、その使命がどこにあるのかということ、常に意識していければと思います。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を備えよ／その道筋を まっすぐにせよ。』」
(マルコ1:3、聖書協会共同訳)

日本同盟基督教団「世の光 NO.829」（2019.10）

「そこにいる教会、ともにいる教会」として

災害連絡室長 宗田 信一

2019年6月20日（火）お茶の水クリスチャンセンターで第4回 JEA 国内災害対策フォーラムが行われました。この会合は JEA 援助協力委員会によって3年前から年に一度行われ、昨年までは諸教団の担当者が参加し、交わり、情報交換し、災害支援を行っている教会ネットワークやキリスト教団体の担当者をお招きし、お話を伺っておりました。そして、今年は全国の教会ネットワークと支援団体の担当者も参加者として一堂に会し、昨年の西日本豪雨災害支援活動を振り返り、教会による支援の課題と今後の展望について共に考えました。

広島県呉市で教会ボランティアセンター長を務めた牧師は、その講演の中で課題として①日頃から被災時に教会はどのように対応するかを話し合い、防災ネットワークを作っておくこと、②ボランティアセンター開設について学び、その準備のための共通理解を持つておくこと、③食料などの備蓄と基金の準備を教会で行うことの3点を挙げられました。

また講演後のグループディスカッションでは、呉市の教会へいち早く駆けつけ支援した広島市内のある牧師からこのような話を聴きました。「初動でできるだけ早く被災地に入り、支援

活動で信頼を得ていけば、社会福祉協議会や自治会などの会合や個人的な関わりの中で、人を慰め励まし導く働きができる。この働きの領域は広い。地域コミュニティーが壊れないように支える宣教のわざ、地域を愛する務めがここにある。普段から教会内の交わりで、牧師と信徒、信徒間で互いの欠けや弱さを受けとめ赦し合う信頼関係を築くことが大事」。

この話を聴いて私は、今後の災害に向けて教会にできる備えは、教会ネットワーク作りとともに、これまで教会が大事にしてきたことを続けることだと思いました。この教会が大事にしてきたこととは、キリストの福音によって「地域に遣わされていること、地域とともに生きること」です。この視点に立つと、普段私たちが週ごとに訪れる日曜日の礼拝に集い、みことばに聴き、聖餐に与り、主を賛美し、交わり、祝福の内に世へ遣わされて行く教会の歩みが、そのまま支援活動に向かう備えとなることが分かります。

この度のフォーラムでは災害支援の教会ネットワークが各地で立ち上げられていることが報告され、フォーラム後の集いで、全国レベルの災害支援教会ネットワークが立ち上げられました。また、災害支援キリスト教諸団体も、ボランティアセンター運営のマニュアルを作り、その実技講義を要望に応じて各地の教会で開催することとなりました。多様化している災害の発生に向けて、「教会から教会へ」祈りと支援の手がさらに重ねられています。私たちも、いつ被災地になるとも知れない地域に遣わされている教会、その地域とともに生きる教会として、教会の本質を大事にしつつ、祈りの内に出て行き、みな喜びに生かされる神の国の完成に向けて仕えていきましょう。
(教団総主事)

日本同盟基督教団「世の光 NO.831」(2019.12)

《連載》教団の教会教育・現状と提言

感謝と提言① 「『キッズ・ユースミニストリー』という枠組みで考えよう」

教会教育部長 本澤 敬子

一昨年、教団内のすべての教会に、教会教育に関するアンケートをお願いしました。7割を超える教会がご回答下さり、教団内の教会教育の現状を知る貴重なデータとなりました。心より感謝申し上げます。

教会教育は子どもから大人までの幅広い年齢層が、イエス・キリストと出会い、従う決心をし、生涯を通して主に従い続けるための助けをするものです。それは聖書を学ぶことだけにとどまらず、クリスチャンとの交わりを通して教えられ、励まされること、奉仕の体験・試練や困難を通して経験的に学ばされることなど、多岐にわたります。現在教会教育部は、全世代対象に受洗準備と受洗後のクラスのためのテキストを発行し、教会教育の一部を担わせていただいています。さらに各教会が、次世代をよりよく育て、キリストにあって成長するために、何ができるか模索しています。

今回、アンケート結果をもとに提言を作成し、それらを冊子にまとめて発行しました。各教会に送られていますので、用いていただければ幸いです(ホームページでも公開しています)。

(<https://www.edu-domei.net/> 教会教育部)

また、まとめた十の提言をより詳しくご紹介し、皆様にも一緒に各教会のこれからの教会教育のためにお考えいただきたいと願っています。しばらくの間、部員一同総力をあげて世の光に連載しますので、お読みいただければ感謝です。

■ 提言①

「『キッズ・ユースミニストリー』という枠組みで考えよう」

◆ 多様なプログラムで

アンケートでは、まず子ども・ユースへの取り組みについてお聞きしました。ご承知の通り、ほとんどの教会が次世代宣教について危機感を持っています。教会学校をしている教会は全体の8割強、平均人数は半数以上が5名以下です。教会学校全盛期を経験してきた教会も苦戦しています。当然、その上の世代の中高生(ユース)たちの人数も減り、中高科がある教会が6割、そのうち8割以上の教会が5名以下の出席者とどまっています。

多くの教会が、教会学校だけでは次世代宣教はむずかしいと考え、遊びを取り入れた子ども会を行っている教会が7割あります。一方で、英会話や子育てサークルなど、多様なプログラムを展開している教

会は全体の4分の1にとどまります。逆に言えば、様々なプログラムによって福音の種まきができる可能性は各教会にまだ残されているとも言えます。

◆ より大きな枠組みで

教会学校は、子弟の信仰継承のためのよりよい聖書教育のために行っている教会が多いようです。各教会に集うメンバーは違いますので一概には言えませんが、子弟にはより深い聖書教育を、教会外の子どもたちには福音の種まきをと、両輪で行っているところも増えています。

より広く種をまくためにも、また子弟への聖書教育の充実のためにも、キッズユースは教会学校だけと限定せず、より多くの窓を開きましょう。大きな枠組みで様々なプログラムを展開することで、多様な次世代を丁寧に育てることができます。

◆ 何人かでも救いに導くために

次世代宣教危機の時代ですが、あきらめることなく教会あげて取り組みたいと思います。労力や費用はかかりますが、祈りつつ福音の種をまき、愛して信仰の成長を励ますとき、必ず主は彼らを主の民として育ててくださるでしょう。希望をもって仕えていきましょう。

「すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです」

(I コリント9章22節)

(国立キリスト教会牧師)

イマヌエル総合伝道団「イマヌエル教報 879号」(2019.10)

聖宣神学院報 「恵みを受ける一杯の水」

院長 河村 従彦

「この小さい者たちの一人に」(マタイ 10:42)

話題の目線は「小さい者」(42節)、遣わされる弟子たちは、人から見れば弱い、小さい者でした。

ところで、用いられるというと、教会の中心で奉仕する者が、他の方に恵みを届ける管になるというイメージで考えます。しかし神の国には、違うイメージもあります。弱い者が用いられる！ 神さまは、水一杯を差し出すような、小さな一コマに自をとめておられるというのです。しかも、差し出した側も共に恵みを受ける、ですから逆転現象が起きます。教師は学生から教えられ、大人は青年から教えられ、親は子どもから教えられ、先輩は後輩から教えられ、牧師は信徒から教えられます。

手前ごとで恐縮ですが、現場に出てすぐに行き詰まりました。伝えるべきメッセージはこれだなどと正論を張ったところで信徒の方々からご信頼いただけない。きれい事はダメでした。そこで信徒の方々を批判してもどうにもならず、どこに持って行くこともできないまま、思いました。「自分の何が足りなかったのだろう」

信徒の方々を、血の通った人間として感じる感性が欠如していたのだと思います。わかったことは、信徒からご信頼いただければ、牧師は一ミリも仕事ができないということでした。まず自分から信徒の方々を信頼しなければ、自分が信徒から信頼される可能性はないこと。教えるというスタンスがそもそも間違っていたこと。信頼いただくことは人が生み出せるものではなく、失敗・挫折を通してイエスさまに出会ったオリジナルな何かが必要だということ。教えられただけのやり方や神学ではダメだということでした。

人の上に立つ必要も人に命令する必要もなく、ただ信徒の方々からご信頼いただける「小さい者」でありたいと思います。満足にできているはずありません。しかし、水一杯を差し出すことで自分も恵みを受ける逆転の発想は、経験的に知っていたと思います。



日本ホーリネス教団「JHC Revival 853号」(2019.11)

施政方針(第6回次世代育成PJ)

次世代育成主事 安井 巖

次世代育成プロジェクト委員会(以下、次世代委員会)が2年前に設置され、これまで各局にあった、総務局・キャンプ委員会、WH連・他、宣教局:ユースジャム、教育局:CS研究会、次世代委員会:MMお茶会、聖書学院が、次世代委員会にまとめられました。それによって、次世代育成の働きが一本の筋の通った働きとなることが期待されています。また、次世代委員会の設置に伴って、次世代育成基金が設けられ、この働きのために直接献金が献げられるようになりました。そこで献げられた献金は、直接、次世代のために用いられるようになります。2017年度は約270万円、2018年度は約590万円が献げられ、このことから全国からの次世代に対する期待の大きさを伺い知ることができます。

そこで、次世代委員会では、この働きが具体的な実りを生み出していくために、次世代に関わる各委員が集まり、次世代委員会のターゲットは子どもから子育て世代のクリスチャンホームであることを確認し、理念の検討を行いました。そこで提案された理念(案)は以下の通りです。

私たちは、次世代育成プロジェクトの働きを通して、神の栄光をあらわし、教会の働きの一環として、次世代育成を体系的かつ継続的に考え、進めていきます。

①次世代育成プロジェクト委員会の各働きは、個々の教会に仕え、その牧会の延長上に位置し、次世代となる人々が、新生や聖化などの信仰体験を経て礼拝の喜びに生き、教会に生きるクリスチャンとなるための援助を行うものです。

②その援助を通し、各人が全人格的に成長したキリストの弟子となることを目指し、その援助が教会に集う世代全体の活性化につながることを目指します。

③各世代層や目的別のプロジェクトの各働きは、互いに協力し合い補い合って、長期的な視野に立って次世代の育成を支えるものです。

④次世代育成プロジェクトの各働きを通して、私たちはキリストの愛の中で、共に育つ育てる喜びに預かり、福音を生きることの喜びを体験し神の栄光をあらわしていきます。

⑤この次世代育成プロジェクトの各働きは、神が与えてくださる時や状況の中で必要によって変化するものであり、今取り組むべき課題と取り組んでいくものとします。

この理念(案)に基づきながら、各働きがこれまでの働きを吟味し、次世代の働きが一本筋の通ったものとなるように進めていきます。

また、「ユースジャム2021」も8月10日(火)～13日(金)でオリンピックセンターを会場に開催することが決定しました。開催に向けての準備を進めながら、多くの青少年との繋がり、関係づくりを持ちつつ、共に育ち育てられたらと願っています

日本イエス・キリスト教団「JCCJtimes NO.804」(2019.11)

「次世代に、確かな内住のキリストを！」

宣教局長 飯田 勝彦

「キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。」(ガラテヤ二章加節)

「わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。」(ピリピ1章21節)

4月より次世代育成プロジェクトが発足しました。宣教局宣教研究室と信徒局青少年室が中心となって取り組んでいます。これまで、プロジェクトの土台となるミッション・ステートメント(働き和使命)とそれに対する取り組みを協議して来ました。その結果、「B-L.I.C(ビーリック)プロジェクト」を提唱致します。

1. Baton touch (バトンタッチ)

このビーリックプロジェクトは、イベントを中心とした働きではありません。プロジェクトの使命は「内住のキリストのバトンタッチ」です。教団が受継いできた臨在信仰は、聖霊のバプテスマによる内住のキリストの恵みです。この素晴らしい恵みを次世代にしっかりと継承していく必要を強く覚えています。なぜなら、内住のキリストこそが私たちを聖さへと導き、さらには宣教の動力となるからです。

2. Life (ライフ・命)

内住のキリストにある臨在信仰の恵みは変わりませんが、次世代にあったアプローチの必要性を感じます。キリストの命を生きる聖書的価値観を具体的に提示します。

3. Influence (インフルエンス・影響を与える)

今は、どの業界もネットワークの力を用いています。その影響力は想像を超えています。クリスチャン人口の少ない日本においてクリスチャン同士が繋がり、互いの交わり中で影響を与え合いながら歩むことは不可欠です。内住のキリストの恵みに生きる者同士が互いに影響を与え合うなら、その相乗効果は日本宣教の前進になると確信しています。

4. Challenge (チャレンジ・取り組み)

キリストの体である教会が、いつの間にか形骸化し、聖書的でないことに力や財を注いで、疲れていないでしょうか？キリストの命が満ちた教会の本来の姿を一緒に考え、次世代がキリストの体として社会に貢献できる教会形成に取り組みます。

次世代とは、内住のキリストのバトンを受継いでもらう全ての世代のメンバーです。

今、教団は様々な課題を抱え新たなステージに向おうとしています。そのカギとなるのが、内住のキリストを次世代にバトンタッチすることです。「B-L. I. C (ビーリック) プロジェクト」のためにお祈りください。

日本福音キリスト教会連合「JECA フォーラム NO.107」(2019.11)

「ホンモノとニセモノの見分け方」

立川駅前キリスト教会牧師 高田 文彦

「高田君、宝石のホンモノとニセモノの見分け方わかる？」 「わかりません：・」

「いつもホンモノにふれているとね、自ずとニセモノはわかるものだよ。」

右は、私が高校時代に受洗前クラスで学んでいたとき、洗礼を授けてくださったK牧師(2019年5月召天)と交わした会話のやりとりのひとコマ。今回の『JECA フォーラム』は、〈異端〉を浮かび上がらせるとのこと。巻頭言を依頼され、真っ先に頭に浮かび上がったのが「見分け方わかる？」というK牧師の言葉。

言うまでもなく、K牧師が高価な宝石に囲まれていたということではありません。宝石鑑定士という専門的な見地から述べたというけでもない。これを霊的な網にくぐらせて思い巡らすと—ホンモノ(正しい教え)にふれていれば、似て非なるニセモノ・悲しい誤りに陥ることはないということなのでしょう。K牧師は続けます。

「ふーぽんクリスチャンになってもダメだよ。」 「潜水クリスチャンになってもいけないよ。ちゃんと泳がないとね。」 そのココロは？

本棚から取り出した聖書に、フーッと息をかけてポンとたたく人になってはいけない(聖書にホコリをかぶせないように)。

月曜日～土曜日まで潜水して日曜日だけ浮上する人になってはいけない(世の中に埋没して聖書に生きるという実践を怠らないように)。

これらのことから、信仰生活の中で、聖書がどれだけ重要か、強調してもし過ぎることはありません。あれ？ということ、異端というといわゆる[教会史][異端論争][キリスト教の基本信条]などなど—体系的に学ぶことも大事ですが、異端は必ずしも対岸の火事ではなく、聖書の軽視と曲解・信仰生活からの脱線という自分の中から(あるいは教会の中から?)出てくるかもしれないということを忘れないようにしたいもの。

礼拝を中心とする教会生活・日ごろよく聖書と祈りに親しむ・家族の間や学校や職場の中でもみ言葉を目の前におく歩みを重ねることでホンモノに一段と磨きがかかり、「ほかの福音」（ガラテヤ人への手紙1章6～9節）が忍び込むスキを与えないように！と、K 牧師から教わったのだと思います。

最後に――誤解を恐れずに言えば、日本の教会が抱える閉塞感などの土壌を背景に、教会のカルト化が起きているのでは、という問題提起をあちこちで聞くようになりました（異端とカルトは違いますが神学を軽んじるという点では似てる？）。強いリーダーシップを発揮する牧師に依存度を加速させる教会員。あるいは、牧師が教会員の批判を封鎖したり絶対服従を求めたりすることなどがそれでしょうか。この原因は1980年代から始まった教会成長論にまで遡る、という人もいます（諸説あり）。

いずれにしても、教会の福音化を妨げるカルト化の問題も、異端の問題と合わせて警鐘を鳴らしていく必要がありそうです。もしかすると、ホンモノとニセモノの見分け方という意味では、カルト化の問題は異端の問題よりも厄介かもしれません。

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団「アッセンブリー News NO.771」（2019.11）

「神に育てられた日本人女性」

七條基督教会(京都府) 村上 恵子

近年、世界における日本人女性たちの活躍には目を見張るものがあります。いつから日本人女性は変わったのでしょうか。また、私たちの社会はどのようにして女性の社会進出を歓迎し、支えるようになったのでしょうか。神は日本人クリスチャン女性を用いるために、歴史の中で育てておられたのです。

今から約130年前（明治7年）、アメリカからたくさんの女性宣教師が自本に送られてきました。それは19世紀に入って、アジア、アフリカに渡った宣教師の妻たちから本国アメリカの教会に宛てられた報告書が始まりでした。「異教徒の中でも、まず虐げられている女性たちが福音によって救われるべきだ。だから女性への伝道に専従できる独身女性宣教師を派遣してほしい」と。その要請に応じて多くの女性が宣教師として立ち上がりました。また彼女たちを派遣する運動に多くの女性が共鳴し、支援したのです。

彼女たちはこう考えました。「次の世代を担う子どもたちを育てるのは女性である。女性たちの価値観が変われば、その女性のもとで育った子どもたちの価値観も変わる。そういう子どもたちが大人になったら社会が変わる。だから聖書の価値観を持つ女性を育てよう」。

聖書の価値観を持つ日本人女性を育てるというビジョンを持って、日本に送り出された女性宣教師たちは女学校を設立しました。女子教育に携わることを中心として日本人女性への伝道に力を注ぎました。横浜を始め、日本各地にキリスト教女学校、ミッションスクールがスタートしました。

神の声に応えた女性たちを通して何が起こったのでしょうか。女性宣教師の愛と、支援者の熱い祈りによって日本人女性が救われていきました。更に、女性宣教師とクリスチャンになった日本人女性たちの取り組みにより、ゆっくりではありますが日本の社会を確実に変えていきました。女性の社会における地位が向上し、社会に貢献する女性を送り出すようになりました。男子だけではなく、女子も大学教育を受けるようになりました。次の世代は娘を海外に留学させるようになりました。今の親世代は、娘がその能力に応じて海外でも仕事をし、社会に貢献することを認め、応援するようになりました。

アメリカのクリスチャン女性は、外国の異教徒たちも福音によって変えられることを信じ、そのために自らを捧げ、自分にできる精一杯のことをしました。福音は女性たちの人生を変え、社会を変え、国を変えていきました。それを証明するのが現代の日本人女性であり、世界各地で小さく弱いものに仕え、平和を作り出している日本の姿なのです。

時代は、世界は日本人女性を必要としています。忍耐強く、謙遜。現地の人と協力関係を築く協調性を併せ持つ国民性。70年以上にわたる平和外交、民間外交によって築かれた日本人へ

の信頼。世界中どの国にも入っていけるパスポート。弱く、小さく、虐げられている者に近づくことが許されている「女性」という素晴らしい賜物。イエス様の愛をもって人々に仕え、聖霊の満たしをいただいて、主の証人として生きている日本人クリスチャン女性。神様はそんな私たちに必要としているのです。

さあ、福音のため心をひとつにして立ち上がりましょう。主の召しに応じて福音を携え出ていく者となりましょう。また宣教者を支援し、その宣教に協力していきましょう。あなたのキリストにある愛と献身が暗闇にいる人々の人生を変え、社会を変え、国を変えていくのです。

日本福音同盟「JEA ニュース No.54」(2019.10)

「神の国」のために苦しみを共有する

JEA 総主事 岩上 敬人

「弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、『私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない』と語った。」(使徒の働き 14:22)

4月1日より前総主事の品川謙一先生の後を引継ぎ、総主事としての働きを始めました。総主事の責任の重さをかみしめながら、多くの方々のお祈りと励ましをいただきながら、6か月を迎えようとしています。何よりもまず未熟な者のために祈りをもって支えてくださる JEA 加盟教団と教会、協力会員の皆さまに心から感謝申し上げます。

総主事に就任してから半年が経とうとする今、使徒 14 章 22 節が心に通います。品川前 総主事が JEA の働きのキーワードとして使っていたのが「神の国マインド」という言葉です。それは主イエスが教えた「神の国」の福音に基づく表現です。冒頭の聖書箇所「神の国に入る」という表現が使われているのは、大変興味深いと思います。神の国は天から地上にやって来る(到来する)だけでなく、私たちが神の国に向かう(到達する)という両側面があることを示しています。

JEA では、神戸での第 6 回日本伝道会議 (JCE6) や昨年 の第 2 回青年伝道会議 (NSD2) を経て、理事会をはじめ各専門委員会を中心に、様々なレベルで幅広い宣教協力の働きが進められています。このように「神の国マインド」という考え方が浸透し、広がっていることは、これまでの取り組みの大きな成果と言えるでしょう。

日本と福音派教会を取り巻く現状は、決して楽観できるようなものではないと、私たちは認識しています。だからこそ JEA は、互いに励まし合い、各個教会、教団や教派を大切にしながらも、その壁を越えて宣教協力を進めています。そればかりか JEA は国内だけでなくアジア福音同盟 (AEA)、世界福音同盟 (WEA)、ローザンヌ運動とも連携しながら世界の宣教協力の一端も担っています。

さて、「神の国マインド」をもって進む道は、決して順風満帆ではなく、苦しみが伴うことを聖書ははっきりと語っています。

「多くの苦しみを経る」という言葉がここに記されています。神の国を建設するための宣教協力を進めようとするとき、どの時代もそうであったように、いつも課題や問題、動かしやうのない現実と直面し、それに伴う労苦、時に痛みがあります。そのような苦しみにひるむことなく、かえって JEA 内で互いに共有しながら、進みたいと願っています。

それは苦しみを乗り越える神さまの励ましですが、私たちにはっきりと約束されているからです。困難な状況の中で神さまは私たちの心を強め、信仰にしっかりとどまることができるよう助けてくださると信じています。また神さまの励ましによって JEA の働きが進むというだけでなく、JEA に所属する教会、教団、宣教団体の一つ一つが生かされ、一つとされて、キリストを証人としてこの世界に仕えるようになることを信じています。

「第3回宣教研究部門担当者会議」

JEA 宣教委員（宣教研究部門）神谷 典孝

今年も5月20日（月）、お茶の水クリスチャンセンターで 教団教派、宣教団体から40名の皆様に集まっていただき、「次世代育成」をテーマに「宣教研究部門担当者会議」が開かれました。

内容は JEA 宣教委員会が行ったアンケート結果の報告から始まり、日本同盟基督教団の首都圏に働きに来る青年たちが教会を超えて交わり祈りあう「DS-COM」の働き（佐野泰道師、後藤正樹師）、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の次世代育成のためのユースリーダーを育成する取り組み（生武嗣幸師）、そして同盟福音基督教会の次世代リーダー育成の試みと近隣の2、3の教会の協力による宣教ネットワーク制度（鴨下直樹師）について発表されました。どの先生の発表も先進的でチャレンジを受ける内容であり、いずれその取り組みの結果や評価が報告されることを期待します。そしてその後には自由闊達な話し合いとなったグループディスカッションがありました。

今回は次世代育成への決定的な施策を見出した、とまではいきませんでした。日ごろ自分たちの団体の働きに忙しい者同士が胸襟を聞いてお互いのことを語り合い、そこから教団教派を超えた交わりや協力を生み出していく場として、この会議が継続されていくことを期待します。

「次世代育成」の現状とこれから

【JEA 総会での次世代アンケート調査報告とグループディスカッション】

JEA 宣教委員（宣教研究部門）柴田 初男・福井 誠

宣教研究部門では、第34回 JEA 総会（6月3～5日）一日目夜のセミナーの時間に、「次世代育成」に関するアンケート調査の報告を行いました。

これは、2018年5月以降、JEA 加盟教団・教派、教会、宣教団体及びキリスト教学校等を対象に、「次世代育成」に関わる取組み状況や現状の課題を洗い出すための現状調査として実施したアンケートの報告で、29の教団・教派、232の教会、13の宣教団体、37のキリスト教学校からいただいた回答を集計・分析し、報告書として取りまとめたものです。

当該報告書は結構の分量があるため、代議員の方には事前に JEA のホームページからダウンロードして報告書を見ていただくようにし、当日はパワーポイントにて説明を行いました。

アンケートからは、各教団の「次世代育成」に対する危機意識の強さとともに、熱心な取り組みもなされていること、またその一方で次世代を育成する人材や体制が十分に整っていない現状も見取れます。

また、各教会の「次世代育成」の取り組みとしては、教会学校（CS）の働きが中心となっています。ところが地域に子どもはいても、教会が人のつながりや地域とのつながりがないうえに、子どもが集まらない現状があること、また教会学校の在り方（学校・教授型）に対する根本的な見直しや振興策の検討の必要性をはじめ、宣教団体やキリスト教学校との連携の強化等の課題が明らかになりました。（柴田初男）

JEA 総会二日目の午後、次世代育成についてグループディスカッションが行われました。参加者130名、16グループに分かれ、次世代育成に関する現場の実態について情報収集するための貴重な機会となりました。ご協力を感謝申し上げます。

内容的には、まず「ノンクリスチャンの子ども・青年の信仰が導かれる環境について」、宣教の方法論以前に、子ども・青年一人一人に向かい合うリーダーの姿勢が大きな課題となっている様子が伺えました。

また、「クリスチャンの子ども・青年の豊かな霊性を育む環境について」は、hi-b. a. や KGK などのパラチャーチ活動やキャンプとの連携をどのように進めていくか、宣教の環境整備が話し合いの中心となるグループが多かったようです。しかしこの点については、関係諸教会と宣教団体とが、地域ごとに顔を合わせて具体的に話し合いを重ねる必要があるとのことでした。またその話し合いのポイントは、目標とする人間観や召命観、連携環境の在り方などでした。

最後に、「特別な配慮を必要とする子ども・青年が育成される環境について」、多くの教会は特別な対応はできず、神の家族として受け入れていく状況に終始していますが、実際に、行政や適切な機関とつながり、抱え込まない対応の在り方についてアドバイスを必要としています。また、親のケア、教会全体の受け入れ態勢の整備と、議論すべき点は多くありました。

また全て次世代、子どもという観点から考えてしまうのではなく、教会が置かれた地域や対象によって、それぞれ固有の課題があり、それらを正しく把握する中で、何を宣教のプライオリティにもってくるかを考え抜くことが、基本として求められていると言えます。（福井誠）

アジア神学協議会ジャパ「ATA/J・AGST/Jニュース 第36号」(2019年11月)

「福音的教会の多様性」

東京基督教大学准教授 篠原 基章

教会は多くの教団・教派に分かれています。一昔前まで、教団・教派の違いは非常に重要な事柄として理解されてきました。しかし、近年、特に若いクリスチャン世代において、教団・教派の違いに関する意識は薄くなり、むしろそれらの違いを障壁として捉え、それよりも一致協力することを強調する傾向がみられます。

H・R・ニーバーは教団・教派の分裂をキリスト教信仰におけるスキャンダルとして批判しました。確かに主イエス・キリストがお命じになったのは、「教会」を生みだす（マタイ 16:18）ことであり、そこに教団・教派を設立するという意図は含まれていませんでした。

事実、新約聖書が教会について語るとき、教会は普遍的教会か地域教会のいずれかを意味しています。ですから、教団・教派に分かれていたとしても、正統的信仰に根差し、同じ主イエス・キリストを告白しているのであれば、異なった教団・教派に属していたとしても、同じ「キリストのからだ」に属するものとして互いに理解しあうべきでしょう。

ですが、このことは決して神学的・実践的な違いを曖昧にするということではありません。教団・教派の違いは、歴史的・文化的・社会的な背景を持っており、それらの違いには「意味」があるからです。教団・教派の違いは「教会論的対話」として理解することができるでしょう。

しかしながら、今日において教団・教派の影響力は限定的なものとなりつつあります。アメリカの社会学者ロバート・ウスナウは、様々な特定の目的のために設立された超教派グループや団体が今日の教会形成と宣教活動において影響力をもつようになってきていることを指摘しています。グローバリゼーションもこの動きを後押ししています。ローザンヌ運動やアジア神学協議会（ATA）は、このような超教派の横断的な働きの良い模範といえるでしょう。

（ATA 総会シンガポール大会 講演要旨）



「これがユダヤ的福音です」

カルメル・アッセンブリー ピーター・ツカヒラ

今は福音のメッセージ全体を回復する時であり、それがシオンからの教えです。過度に恵みや信仰を強調せず、信仰と行いは一つの真理の両面なのです。新約聖書でパウロは、多くの手紙を異邦人に向けて書き、マタイの福音書やヤコブの手紙などはユダヤ人のために書かれており、その内容には明らかに異なります。今はこれらを一つにする時なのです。

〈エペソ 2:12〉にあるように、何千年も神を信じてきたのはユダヤ人だけです。そこに何も知らない異邦人が、イエスの福音に救われた。彼らに対してパウロは信仰を強調しました。ユダヤ人になる必要はないが、神を信じて神の国に入ることが必要だと。そうすれば、契約の民と肩を並べることができる——

これが異邦人に伝えられたメッセージで、西欧の教会はこの教えを基礎に、信仰のみによる救いというメッセージを組み立てました。このイエスにある信仰は絶対に必要なもので、それ抜きに神を喜ばせることはできません。このことで、私たちに永遠の命への道が聞かれたのです。

*** 玄関しかない家**

しかし、信仰のみでは玄関だけの家のようなものです。生活するための、さまざまな要素が必要です。「ワンネス」の中には、この異邦人向けとユダヤ人向けの福音、信仰と行いが「一つであること」を回復するという要素も含まれます。これがユダヤ的福音です。

〈ヤコブ 2:14~17〉にあるように、行いを伴わない信仰は役に立ちません。ヤコブが記すように、悪霊も神やイエスを知っていて、ある意味「信じて」います (19)。しかし悪霊が救われないのは、彼らの行いが神に反しているからです。

良きサマリヤ人の例えで、イエスの答えは「信じなさい」ではなく「行いなさい」でした (ルカ 10:28)。この律法学者はすでに神を「知り」「信じて」いたので、行うように教えたのです。

*** 信じているなら行いがあるはず**

聖書を何千年も信じてきたユダヤ人の問題は、信じていても行わないことでした。今は異邦人クリスチャンも 2000 年聖書を信じています。私たちは、当時のエペソ人のようにゼロからのスタートではありません。神の意志を行って世界を変える必要があります。良きサマリヤ人は地上の人々に注意していました。私たちは「神ばかり見ている」のではないのでしょうか。もっと隣人に目を注ぐべきです。良きサマリヤ人は人種や宗教など多くの障害を打ち破ったのです。これが、私たちの「王」が命じる隣人の愛し方で、誰でも実行できることです。

隣人愛を行うことで、ユダヤ的福音が王国を実現します。この行動によって、私たちは尾ではなく頭になるのです。どこでも主に仕えることを学んで行えば、神の栄光と臨在が表れ、油注ぎや奇跡が実現します。皆さんは、主イエスを信じたら、その御心を行うべきです。信じて行い、世界を変えましょう。

(2019 年 8 月 13~16 日に、タイのバンコクで「ONENESS (一つであること)」をテーマに開催されたアジア・メシアニック・フォーラム (AMF) での講演の一つ。20 カ国から参加者約 700 名)



あとがき

2020年、新たな年を迎え、ここに第17号を発行することができることを感謝いたします。本年も引き続きご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

今回号の巻頭言は、東京基督教大学 菊池 実教授にお願いして執筆していただきました。

菊池先生は、旧約聖書学、聖書考古学、中間時代史等を専門とされ、周到に準備された先生の授業は、学問や教育に対する誠実さや熱心さが如実に感じられるものでした。

先生の話では、近年ユダヤ的聖書解釈や実践に信徒だけではなく牧師も入れ込んで、教会で問題になっているケースが少なからずあるということです。ユダヤ的視点、ヘブライ的語感はその当時の文脈で読む上で一つ大事なことではありますが、ユダヤ的聖書解釈の良さと問題点の両方に、ちゃんとした理解を持つ必要があると言われていました。

聖書解釈においては、当然のことながら当時の社会的・文化的・地理的条件や文脈等を踏まえて解釈することの重要性は言うまでもないことですが、ユダヤ的聖書解釈を、批判的な立場に立って学びをするならともかく、傾倒するあまり唯々諾々として一方的に偏った解釈をそのまま鵜呑みにするようでは問題です。「これがユダヤ的福音です」(P. 21) と言われているように、「過度に恵みや信仰を強調せず、信仰と行いは一つの真理の両面」であるとするバランスのとれた聖書解釈が求められているのではないのでしょうか。

こうしたことは、牧師としては聖書全体からの福音的な聖書解釈と神学的な見識が問われる問題だとも言えるかと思えます。

今回号では、【JMR レポート】として「九州宣教フォーラム2019」における竿代照夫師の講演のレジュメを掲載させていただきました。先生は、聖書的な教会形成における原理・原則を、非常にわかりやすく語ってくださいました。

そこに示されている聖書的な教会形成の原理・原則は、教会の規模には余り関係はないと言えます。それぞれの教会の実情に合わせて、原理・原則をどのように適用し教会全体をリードしたらよいかを考えるのが、リーダーたる牧師や役員の重要な務めであり働きでもあります。

日本国内でも成長している教会が、いかにして原理・原則を適用し、真剣に取り組んできたかを知るには、参考となる書籍がたくさん出版されています。こうした他の教会の実践的な事例から学ぶことは、自らの教会が「井の中の蛙」にならないためにも、また共同の教会の枝としても必要なことではないかと思えます。

日本の教会全体が健全な成長を遂げていくためには、「聖徒を整え、奉仕の働きをさせ、教会を建て上げるため」(エペソ4:11-12) に立てられている牧師の力量と意識にかかっている、と言っては言い過ぎでしょうか。 (初穂)

献金者名 (2019年10月~2019年12月)

◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。(敬称略)

渋谷和之、島田治夫、花蘭文子、三宅規之、清瀬グレースチャペル、清瀬福音自由教会、センド国際宣教団、日本キリスト合同教会、本郷台キリスト教会

【刊行物紹介】

データブック
『日本宣教のこれからが見えてくる』
CD-ROM 版（好評発売中）



データブック
日本宣教のこれからが見えてくる
——キリスト教の30年後を読む
第6回日本伝道会議「日本宣教170 ▶ 200プロジェクト」編者

●下記資料、データも収録!!
FCCブックレット「宣教の革新を求めて」(付属データ付)
プレゼン資料: 1. JCE6ワークショップ発表資料 (PowerPoint)
2. 「震災と信仰調査」(PowerPoint)

DataBook

グラフや図がカラー
表も見やすい
有用なデータが満載
プレゼン資料も収録
定価 1,000 円 + 税

【CD-ROM の内容】

- 『データブック「日本宣教のこれからが見えてくる」—キリスト教の30年後を読む』
- 『データブック FCCブックレット「宣教の革新を求めて」(付属データ付)』
- プレゼン資料: 1. JCE6ワークショップ発表資料 (PowerPoint)
2. 「震災と信仰調査」(PowerPoint)』


【編者】第6回日本伝道会議「日本宣教170 ▶ 200プロジェクト」
東京基督教大学国際宣教センター 日本宣教リサーチ
【発行】日本福音同盟 (JEA) 宣教委員会

キリスト教葬儀研究会

日本宣教におけるキリスト教葬儀
開かれたキリスト教葬制文化を目指して

巻頭言	倉沢正則
一般葬儀とキリスト教葬儀の現状	柴田初男
日本の葬送儀礼の宗教的背景	大和昌平
葬儀論から日本宣教論へ	稲垣久和
近代日本における死者儀礼と教会	篠原基章
—キリスト教葬制文化を形成していくために—	
未信者にも開かれたキリスト教葬式を求めて	倉沢正則
キリスト教葬制文化開拓のケース・スタディ	清野勝男子
付記「キリスト教葬儀に関するアンケート調査」報告書	日本宣教リサーチ
まとめ	大和昌平
コラム 1～5 終活セミナー開催の理由他	野田和裕

NO.10 February 2018


 東京基督教大学 国際宣教センター

定価 1,000 円 + 税
好評発売中

【お申込み・お問合せ】
E-mail: fcc@tci.ac.jp FAX: 0476-31-5521

感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ（JMR）は、今年の4月で発足から7年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス（CIS）の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2020年度も、2019年度と同様、「JCE6「日本宣教170▶200プロジェクト」の流れを引き継ぎ、JEA（日本福音同盟）宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「次世代育成」「地域宣教ネットワークの構築」「教会の再生」に取り組んでいきます。

どうか引き続きJMRの働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

JMRの活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

(1) **特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等

- ・一口 30,000 円（何口でも）
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年2～4回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年1回「JMR 調査レポート」のご提供

(2) **一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等

- ・一口 2,000 円（何口でも）
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年2～4回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年1回「JMR 調査レポート」のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金（献金）は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金（献金）額の約50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131（TCI 募金係）までお尋ねください

郵便振替口座：00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

- * お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。
（振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします）



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5
学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL：0476-31-5522 FAX：0476-31-5521 E-mail：jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一（東京基督教大学学長）
日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男